

コウノトリ湿地ネットニュースター

パタパタ

No.
17

コウノトリ湿地ネット

- 🏠 豊岡市城崎町今津 1362
- ☎ 0796-20-8560
- ✉ toshima8506@iris.eonet.ne.jp
- 🌐 <http://wac-s.net>



目次

- またまた、新たな局面に入った野生復帰……………1
- コウノトリ保護増殖センターの飼育員として……………4
- 絵図から探るむかしの豊岡……………5
- 世界湿地の日シンポジウム IN 渡良瀬遊水地……………8
- “地元の人から地元の人へ”……………10
- ラム歩き(六方田んぼの冬鳥観察)・コウノトリの結婚相談……………11
- ハチゴロウの戸島湿地便り……………12
- 編集後記……………13

3月27日立石たんぼにて 花谷英一氏撮影



アカガエル産卵調査

3月10日、恒例のアカガエル産卵調査を田結地区で行いました。耕作放棄地に板柵を設けたり池を掘って湛水した効果を調べるものです。今年は地元の女性ガイドグループ“案ガールズ”の面々も参加されました。

湛水箇所ややり方によって、卵塊の数がずいぶん異なることをみんなで確認しました。



今年第1号のボランティア作業

3月20日(火曜日)春分の日の朝『こころ豊かな500人会』の女性メンバー2名の方が、ボランティア作業にきてくださいました。以前から気になっていた、大雪の為、進入路の山肌我倒れている竹などを切りゴミや枯れ木を集める作業をお願いしました。今年一番のボランティア作業。女性同士、仲良く頑張りました。感謝。



ヒナ誕生!

4月2日午後0時03分、ハチゴロウの戸島湿地人工巣塔でヒナ2羽の孵化と卵1個を確認しました。確認は、いつものとおり裏山に上ってスコープで覗いたものです。地上からは巣内が見えないので、親鳥の様子から産卵や孵化を推定しています。で、2月27日初卵、35日経過の4月1日孵化と推定しました。2日に見たヒナは首もしっかりしていたので、1日の孵化かなと…。ともあれ、元気で巣立ちしてくれるのを期待しています。

またまた、新たな局面に入った野生復帰

コウノリ湿地ネット代表 佐竹節夫

28年ぶりの大雪に見舞われようが、水温が一向に上がらまいが、生きものたちにはしっかりと春の足音が分かるようです。2月末には例年と変わらず、田んぼや湿地でアカガエルが産卵を開始しましたし、フキノトウも雪のそばで顔を出していました。コウノリも3月末時点で戸島、野上、百合地、鎌田、伊豆の5巣で抱卵中です。人間の方も通常のペースを保ちたいと思います。

●今春の繁殖について

通常のペースといっても、こと野生復帰に関しては常に次の事態を予測しながら先手先手を打っていく必要があります。時期を逸するとコウノリの行動に間に合わず、みすみす定着・繁殖のチャンスを逃すことになりかねません。そんな思いを抱きながら、今シーズンの前半に見られたいくつかの特筆すべきことに、私見を述べてみたいと思います。

●電柱での造巣を人工巣塔へ誘導する策はないものか

① 野生個体エヒメペアのケース

一つの種が将来にわたって生存するには、遺伝的多様性を保つことが大きな要素であると言われていています。平成23年5月末現在、国内の飼育下、野外にいるコウノリは230羽ですが、ミトコンドリアDNAで見ると本年3月末現在で9つのハプロタイプ（遺伝系統）しかなく、うち8タイプが豊岡にいます。現実的な家系図で見るとまだ多様性が存在しますが、系統別個体数に偏りがあるので、将来にわたって健全な遺伝子を保とうとすると、「国内外の施設と積極的に個体の交換をおこなう」ことが必要です。最善は大陸から野生個体が飛来し国内の個体群に加わってくれることで、平成18年に飛来し21年に放鳥個体とペアを形成・繁殖した野生のエヒメ♀はまさにそのケース。「遺伝子プールに新たな遺伝子を供給」してくれた貴重な存在です。（「コウノリ野生復帰ランドデザインより」

このペアの営巣場所がコウノリの郷公園内飼育ケージ奥であったため、鳥インフルエンザ予防対策上撤去され、2月21日に公園北東部の山の中腹に新巣塔が設置されました。



止まっている個体は J0021 です。巣材は人間が置いたもの。上のカメラが問題かも・・・（3月27日撮影）

3月末現在、この引っ越し作戦は残念ながら成功していません。ペアは周辺の電柱で造巣しようとして電力会社に撤去され、また他の電柱に巣材を運ぶ、撤去されるということを繰り返しています。そのため、郷公園では貴重な遺伝子を確保するために更に人工巣塔の設置を準備中です。

せっかく「里の鳥」になったのですから、郷公園に任せきりでなく、みんなで考え、できることを支援していきたいですね。このペアの造巣状況は、毎日観察している当会メンバーがブログ・stork-field (<http://uzks87732-gaia.blog.eonet.jp/default/>) で発信していますので、ご覧ください。

※この巣塔移設時期に関しては、戸島ペアの観察から、晩秋までに設置完了すべきだったと思っています。戸島ペアは、例年、ヒナを巣立ちさせた後は巣の付近を離れ、10月末に巣に戻って1度(?)マウンティングし、その後は少しずつ巣を中心にして暮らしながら繁殖期を迎えます。雪が降るまでに営巣場所があることを意識させておくことが必要なのかなと・・・。

※電柱での営巣は、コウノリの感電事故や送電支障を生じる恐れがあるため、電力会社による巣材撤去は必要措置です。もちろん、郷公園とも協議しながら行われていますので、「冷酷な」と誤解しないでください。ただし、造巣防止器具は改善の余地があるかもしれません。



電柱に造巣するエヒメ 3月18日撮影

② 放鳥2世ペアのケース

今春、京丹後市久美浜町で戸島湿地から巣立った♂3歳と野上から巣立った♀3歳がペアを形成しました。放鳥2世同士で、繁殖が成功すれば野生復帰第2ステップ到達と位置付けられるものです。同町では、昨年来頻繁に飛来し出したことから10月には有志が集って「コウノリと共生するまちづく

りネットワーク京丹後」を結成されて熱心に保護活動を展開され、既に人工巣塔も2基設置されています。3月初旬には巣上での交尾行為が見られたので産卵に進むかと期待されましたが、その後は造巣場所を付近の電柱に移してしまいました。ここでも電柱に造巣～電力会社が撤去～他の電柱に造巣～撤去～を繰り返しています。そのため、ネットワーク京丹後では、新たな巣塔設置を準備されています。

③ 人工巣塔での営巣誘導策を考えよう

なぜ、人工巣塔が魅力ないのでしょうか。巣塔の設置場所？ 本数の不足？ 設置時期？ 構造上(巢台、強度、高さ等)の問題？ 周囲の有害物(カメラなど)？ あるいは電柱の方を好む習性？ 現時点では不明です。豊岡ではこれまでに10基(百合地、福田、赤石、戸島、野上、郷公園、伊豆、山本、袴狭、鎌田)の人工巣塔で営巣していますが、人工巣塔で営巣するまでに電柱、鉄塔、飼育ケージ屋根で造巣するケースがほとんどで、中には電柱でそのまま繁殖した例(野上、日撫)もあります。最初から人工巣塔を使ったのは戸島と鎌田だけです。これほどまでに電柱を好む理由は何なのか。以前、野上で電柱に営巣したときには、並んで建っている電柱の列が林か並木のように、落ち着くのでは・・・との声もありましたが・・・。

かつてハチゴロウが自然木(マツ)に造巣した例はありましたが、営巣に適する木がほとんどない里山の現状を考えると、当分望めそうにありません。ランドデザインでは各ペアのなわばりの観点から巣塔の適正配置が必要と述べられていますが、これとてまずは巣塔で造巣する気になってくれないと話が進みません。なんとかスムーズに巣塔での造巣へ誘導する方策はないのでしょうか。ご意見をお寄せ下さい。

※平成20年春、形成したばかりのペアを戸島巣塔に誘導するために給餌したことはあります。

※電柱の形が好きなのではないかと、郷公園のアイデアにより日撫地区に円形巢台を変更し、電

柱に似せた巢台の塔が設置されています。現時点ではまだ利用されていません。

●各ペアそれぞれに地元支援部隊が必要になってきた

以前にも触れたと思いますが、ペアや個体数が増え、加えてそれぞれの行動が目まぐるしく変化している状況の中で、コウノリに直接的に関わる人の数が不足しています。典型的な例が、今春の山本ペアの繁殖失敗です(まだ可能性はありますが)。産卵しても、雌雄とも採食は遠く郷公園まで出かけなければならなかったため、巢が空になったすきにカラスにやられたというものです。巢塔の近くに餌場があり、給餌されていればと侮やまれます。

このとき、給餌是か否かの議論に当会は全く関心がありません。餌生物がない場合は、繁殖を給餌で支援することは野生復帰に関わるものとして当たり前のことであり、「見守る」などの綺麗事は論外だからです。

問題は、誰がペアに関わるかです。当会は年初でグチったように、今のところ戦力不足で戸島とククヒ湿地で精いっぱいです(‘_’)。それぞれの巢の地元の方が主体的に行動されることが理想ですが、すぐに軌道に乗ることは困難でしょう。であれば、当面は行政に音頭を取っていただくことがいいように思うのです。ぜひ、検討をお願いします。

先述の久美浜町での造巢では、地元グループの取組みに対し、何と行政区域の違い(兵庫県・豊岡市と京都府・京丹後市)を乗り越えて郷公園、両市の担当者レベルで支援の模索が始まりました。当会も市民グループ同士の交流を進めています。地元市民が主体的にコウノリ保護活動に取り組む。それを地元行政が支援する。放鳥元の郷公園、経験知を有する豊岡市行政と市民グループがバックアップする、という形でうまくいくかのテストケースかもしれません。次号でその成果を報告できるよう願っています。

●トピックス

今春のトピックスは、鎌田巢塔での新ペアによる営業です。人工巢塔が建っている場所は、何と市立三江小学校の校庭、バックネットの裏です。平成18年に但馬銀行から巢塔建柱の申し出があったとき、市の担当者であった私は、「放鳥コウノリが羽休めに止まってくれば子どもたちに良い教材になるだろう」くらいの気持ちで設置場所を決めました。営業までするとは私も郷公園の研究者も考えていませんでした。

それが、あっという間に放鳥1世♂、2世♀がペアを組み、交尾し、造巢して、3月中旬には産卵が確定されたのです。3月末現在、しっかりと抱卵しています。

驚かれたのは先生方です。子どもたちにどう指導していけばいいのか。グラウンドでの体育授業はどうすれば…。球技をしてもいいのか。大声はどうか。放課後の大人(野球等)への対応は…。不安が一杯募ります。「子どもに行動規制すべきではない。野生鳥なのだから気にせず、普通に行動すればいい」との声も入ってきます。

さあ、あなたなら、子どもたちにどう言うでしょう。

自分の学校にコウノリが来て、巢をつくり、卵を抱き、ヒナを育てる(だろう)。こんな学校は、世界中どこにもありません。子どもたちにとっては人生の大きなチャンス、恵まれていることだけは確かです。(4月3日の暴風で卵が巣材ごと吹き飛ばされました。残念…)



三江小グラウンド端に立つ巢塔



コウノトリ保護増殖センターの飼育員として

(コウノトリの郷公園 吉沢 拓祥)

コウノトリの郷公園付属コウノトリ保護増殖センター(以下センター)は、名前のとおりコウノトリの保護増殖を行っている施設です。施設は非公開のためあまり知られていませんが、1965年から保護増殖事業が開始されたという歴史ある施設です。私がセンターの飼育を担当するようになってからの8年間に見て感じたことを、書いてみたいと思います。

センターの第1ケージは、1965年の施設開設時に建てられた最も古いケージです。約半世紀という歴史あるケージですが、2010年まで使用していました。飼育下の初めてのペア誕生、初めてのヒナ誕生など、飼育の歴史によく出てくるのがこのケージです。そのほかにも様々な形状の12基のケージがセンターには存在します。どのケージも繁殖のための工夫がされています。



ケージ以外にも、センターの設備で歴史を感じるものが、山水の引き込みと採取方法です。動物の飼育施設は、水を確保するということが設備の重要な課題です。その課題を解決するために、センターでは山水を各ケージに引き込んでいます。その原理はポンプなどの動力を使用しないで、サイフォンの原理と山の高低差を利用しただけのシンプルなものですが、採取した水はポンプで各ケージに入りますが、引き込みには電気などを一切使用していません。しかし、雨水、落葉などでパイプが詰まりやすく、維持管理をまめにする必要があります。センターはこのような設備1つをとっても、過去の飼育員の努力の跡を感じるような施設なのです。

施設に歴史があるということは、飼育しているコウノトリにも歴史があります。昨年12月末に死亡した個体は、1972年に野外から豊岡に連れてきた個体です。愛称は「鹿児島」と呼ばれる個体で、郷公園の歴史の中で最高齢でした。コウノトリの保護増殖から野生復帰までを見てきた個体の1羽だと思います。この個体が死亡したとき、飼育の歴史が1つ終わったように感じました。センターには、この「鹿児島」と同じように歴史あるコウノトリが大勢飼育されてきました。私に関わった歴史あるコウノトリを少し紹介したいと思います。

愛称「吉川」と呼ばれる1971年に豊岡に来た雄がいました。先ほど紹介した「鹿児島」と「吉川」はペアを形成しており、Kペアと呼ばれていました。繁殖が期待されたペアの1つでしたが、1998年から2004年までの6年間の間、毎年のように卵を産みましたが有精卵は取れませんでした。2005年から「吉川」が亡くなる2007年までの2年間は、卵を産むこともなくなりました。両個体ともセンターに来て35年なので、高齢が影響したかもしれません。

Kペアとともに代表される高齢ペアに、Hペアと呼ばれるペアがいました。雄は、1981年に多摩動物公園から豊岡に来たので愛称は「多摩」といいます。雌は、郷公園で一番名前の知れている「武生」と呼ばれる個体です。「武生」は1971年に福井県の武生市(現越前市)で保護され、豊岡に入った個体です。このHペアは1990年にペアが成立し、2003年に雄が亡くなるまでの13年間の間に1羽の子供を残しています。この子供が現在、ペアを形成し、次世代にHペアの子供が繋がったことはコウノトリの飼育の歴史の中ですごく重要なことでした。

コウノトリはペアを形成することが飼育下では難しく、豊岡では繁殖成功までに20年以上かかっています。このような苦難の時代から現在の野生復帰(放鳥)の時代を生きてきた高齢なコウノトリたちは、静かに身を引くように2003年以降に老衰で亡くなっていきました。彼らの死に関わる毎に、コウノトリの保護増殖の始まりがこのような個体により支えられていたと感じ、繁殖の歴史を忘れることなく飼育や野生復帰に関わっていきたく強く思うようになりました。

野外のコウノトリは、2007年以降毎年ヒナが誕生し、順調に個体数が増えています。飼育施設はいらなくなるのでは、とよく聞かれますが、まだまだ飼育下繁殖をやめることはできないと思います。なぜなら、野外のコウノトリの数はまだ圧倒的に少なく、いつ絶滅してもおかしくない個体数だからです。そのためにも繁殖を目的に飼育を行っているセンターの存在は大きく、飼育員の責任も大きなものがあるように感じます。ただ単に個体数を増やすだけではなく、飼育下と野外の個体の系統を考慮し、新たな系統のペアの形成を目指さなければならないのです。上述したように、飼育下ではコウノトリのペア形成は難しく、簡単ではありませんが、センターの飼育員として過去の歴史あるコウノトリたちや飼育員が築いてきた土台の上で、新たなヒナやペアを誕生させる努力をこれからもやっていきたいと思っています。

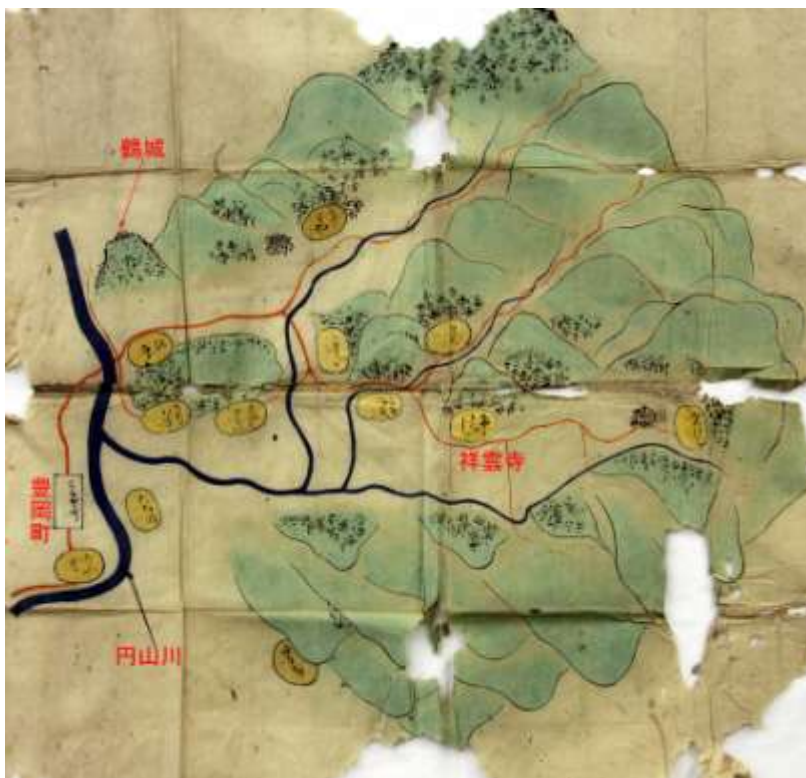


コウノトリが野生でいたころの豊岡 — むかしの絵図から —

(但馬歴史文化研究所 石原由美子)

1・三江の周辺

コウノトリが野生ですんでいたころ、豊岡はどんな所だったのでしょうか？
むかしの人が作った絵図(えず)から探ってみましょう。



まずは江戸時代(1603～1869年)のコウノトリの郷公園周辺の絵図を見てみましょう。モコモコしたうす緑色は山です。⇒でしめした山のでっぺんがたいらで建物があるのがわかりますか？いまは愛宕神社(あたごじんじゃ)があるので愛宕山(あたごやま)の名で知られていますが、鶴城(つるじょう)という戦国時代のお城のあとです。山の形が翼を広げて飛ぶツルの形をしていることから鶴城と名づけられました。もちろん、お城が作られたころにはツル(コウノトリ)が飛ぶ姿をあちこちで見かけられたことでしょう。

祥雲寺村文書から(豊岡市教育委員会提供)

絵図の説明にもどります。こい青色のくねくねした線が川です。その中で一番左の太い線が円山川です。朱色の線は道です。一番太い道でも円山川よりずっと細いですね。むかしの円山川はいまの国道と同じくらい大切な交通路でした。豊岡のたんぼでとれたお米は、舟に乗せて今の城崎にあった米蔵(こめぐら)に運ばれました。城崎温泉へ行くのも、せまくて危険ながけ道よりも、舟に乗って行くほうが便利でした。津居山(ついやま)の港からは、とれたての魚が円山川から出石川をさかのぼって出石の町までとどけられました。

黄色い小判のような印は、村のある場所を示しています。中に書かれているのが村の名前です。今でも残っている地名がほとんどです。公園のある祥雲寺村もあります。一か所だけ白でかこってあるのが豊岡町、つまり現在の豊岡の中心街です。山と川と道のあいだの白い空間は、たんぼとはたけです。

2. 佐野の周辺

もうちょっと近寄って見てみましょう。次の絵図は佐野村(現在の佐野地区)のものですが、江戸時代から明治のはじめにかけて豊岡の農村は、どこもこの絵図のようであったと思われます。



佐野村耕地図「(豊岡市教育委員会提供)」

モコモコが山で、山の上に神社があるのもいっしょですね。こちらは雷神(いかづちじんじゃ)です。

青色のクネクネが川なのもいっしょです。一番太いのが円山川なのも同じですが、古川と書かれています。道はうすい茶色で、村は黄色いワラ屋根の家の集まっている場所です。山のふもとが奥佐野村いまの上佐野地区、絵図の右よりの家の集まりが佐野村です。

一軒だけはなれて垣根にかこまれているのは庄屋(しょうや)といって、村長さんの家です。庄屋の右、道ぞいに石塔のようなものが二つありますが、一つは小便地蔵(しょうべんじぞう)さんかも知れません。ちょっとはなれて薬師堂(やくしどう)があります。薬師とは病気をなおしてくれる仏さまです。

村のまわりの色のない場所は、やはり畑とたんぼです。佐野村の手前に大きな松の木があります。ほかの絵図にもこの松は登場します。村のシンボルだったのでしょう。たんぼにかこまれた場所にはえる大きな松にはコウノトリが巣をつくることもあったかも知れません。

3. 水びたしの豊岡盆地

さて、こんどは江戸時代の豊岡盆地(とよおかぼんち)の全体がどのようなようであったかを絵図から見てみましょう。



「大石家（小田井神社）文書」（豊岡市教育委員会提供）

この絵図は書かれている内容から江戸時代の天保7年(1836)以後に作られたものとわかります。正式な題名は「但馬国内国府之谷朝来郡養父郡気多郡出石郡城崎郡百川集会並停水場耕地一覽図」つまり、円山川の本流、支流から集まった大水で水につかってしまった豊岡盆地のたんぼや畑の図です。

灰緑が山で、とにかくまわりは山だらけです。青いのが川、細く赤い線は道ではなく堤防です。そして茶色が水がたまってしまった畑やたんぼの部分です。注意書きには「五日たっても七日、十日たっても水が動かないので腐ってしまった」とあります。つまり、ひとたび大雨がふれば水びたしのドロ沼になってしまうのが、円山川のまわりの土地でした。

明治4年(1871)ころの絵図を見れば、円山川や支流の出石川がはげしく蛇行(だこう)しているのが、もつとよくわかります。



明治4年円山川出石川流域図（豊岡市教育委員会提供）

クネクネするとよけいに水の流が悪くなり、土砂がたまってさらに水があふれやすくなります。

これが、コウノトリが野生でいたころの豊岡盆地の姿です。ドジョウやコウノトリにはいいでしょうが、人には住みにくい土地でした。

それをどうにかしようと明治時代から大正時代にかけて円山川や出石川では国による大改修工事に先がけて、土砂を取りのぞく工事があちこちで行われました。

ハチゴロウの戸島湿地周辺も、今から百年近く前の大正6年(1917)に、円山川の流れのじゃまになる場所を切り取り、たまった土砂を取りのぞきながら堤防を作る工事が行われています。

注目したいのは、切り取った土の中でも、水を通しにくいねばりの強い土や、湿地に生えるアシの根っこ

部分を堤防に使い、表面にシバを植えるなどしたことです。「切り取った土を使うので土代はかからない」と工事の報告書には書かれています。また、玄武洞(げんぶどう)付近では流れのじゃまにならない場所でアシをそのままにし、無料で刈り取るのをゆるしました(アシはすだれなどの材料になります)。エコロジーでエコノミーですね。



大正6年度工務附図(豊岡市建設課所蔵)

こうした工法を用いたことが、戸島湿地がいまにいたるまで動植物にやさしい環境を保つことができた理由のひとつだと思います。

4. おわりに

古い絵図を使ってむかしの豊岡盆地の姿を見てきました。今では絵図の中にしか残っていない風景もたくさんあります。絵図に描かれることのないままに消えてしまったものもあります。生き物などは特にそうですね。戸島に近い赤石では、カワウソがいたことがむかしばなしとして残っているだけです。

絵図はとても不正確ですし、おおざっぱですが、神社を描いてみたり、家のまわりの木や竹を描いてみたり、ふだん見ている地図より親しみやすいのではないのでしょうか？

以上、絵図と同じく大まかなお話でした。さいごに、資料の掲載を許可していただいた豊岡市建設課、絵図の掲載許可をいただいた豊岡市教育委員会文化振興課の皆さまへ感謝を申し上げます。



世界湿地の日シンポジウム IN 渡良瀬遊水地』に参加しました

(コウノトリ湿地ネット事務局長 森 薫)

2月18日に栃木県栃木市に於いて開催された『世界湿地の日シンポジウム IN 渡良瀬遊水地』に参加しました。前日の17日には、『渡良瀬遊水地をラムサール条約登録地にする会』の楠会長、浅野事務局長、世話人代表の猿山さん等に渡良瀬遊水地を案内して頂きました。

関東平野の真ん中に、栃木、群馬、埼玉、茨城の4県にまたがる日本最大の遊水池・渡良瀬遊水池があります。本州最大のヨシ原が広がる大湿地で、その広さは33km²、希少な動植物が多種類生息している自

然の宝庫となっています。日本の公害の原点、足尾鉍毒のため廃村にさせられた谷中村があったところで、鉍毒を沈殿させる目的で渡良瀬川下流に造られました。

ヨシ原を渡る寒風に吹かれて渡良瀬に立ち、その広さに驚き、滅亡に追い込まれた谷中村の歴史や、鉍毒事件を告発して奮闘された田中正造翁の言葉「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」が、原発問題で揺れ動く今、殊更心に響きました。



18日のシンポジウムは、ラムサール・ネットワーク日本と渡良瀬遊水池をラムサール条約登録地にする会の共催で、ラムサール COP11 の国内プレ・イベントとして開催されました。テーマは「コウノトリでつなぐ豊岡と渡良瀬遊水池」で、同遊水池が今夏、ラムサール条約の登録湿地になる可能性があり、同時期に登録を目指す豊岡市からも出向き、登録後を見据えた目標などが話し合われました。

シンポジウムの第1部では、湿地保護全国キャンペーン「湿地のグリーンウェイブ」の参加団体がキャンペーンでの活動内容や各地の湿地保全の状況について報告され、意見交換が行われました。午後の第2部では、COP11 で条約への登録を目指している渡良瀬遊水池と、円山川下流域に焦点をあて、条約登録の意義や今後の保全構想などについての活動を報告し合い、2つの湿地に共通した課題や、保全推進における連携の可能性などについて話し合われました。

ラムサール条約では、人も自然の一部と考え、野生生物と人が共に生きるための賢明な方法を見つけることが求められているとされています。関東ネットワークの自治体が、コウノトリを迎えようとしていることは、人里で暮らす鳥をシンボルにして自然再生を行うことを目標にしている、日本の公害の原点の地と、コウノトリ最後の生息の地とつなげて、コウノトリを核にしたこのようなシンポジウムが開かれたのだと思いました。兵庫県知事の「ほろびゆくものはみなうつくしい。しかしほろびさせまいとするねがいはいはもっとうつくしい」の言葉を思い、「山や川を汚していないか。村(自然)を大切に暮らしているか。家族、隣人を想っているか」「弱きものに心を留めているか。支えているか。寄り添っているか」先人からの問いかけが聞こえてきました。

シンポジウムのあとには交流会が開かれ、自己紹介や活動の詳細など思い思いの話が弾み、スタッフの方のご配慮により、楽しいひとときを過ごせました。パネリストの方だけでなく、参加者全員にマイクが向けられ、トップバッターの豊岡市コウノトリ共生課の山本さんが「行政として、市民と連携したいと思っているがどうすれば市民の皆さんと連携していけるのか要望を聞かせてほしい」と話されました。会場では、(豊岡ではよく聞く言葉と思っていましたが)そういう行政の姿勢に驚きと感動の声が渦巻きました。

ラムサール・ネットワーク日本・渡良瀬遊水池をラムサール条約登録地にする会の方々の熱意と行き届いた準備でもって進められ参加者同志の交流が生まれたことと、コウノトリ共生課の山本さんの言葉が反響をよび、いろいろな活動をされるに、豊岡の行政の姿勢が伝わったことは嬉しいことでした。

“地元の人から地元の人へ”

有限会社 晃 吉元沙知

昨年4月から一年間、緊急雇用就業機会創出事業によりハチゴロウの戸島湿地を拠点としてコウノリツーリズムに取り組ませていただきました。

現在、コウノリの野生復帰に向けて様々な取り組みがされていますが、コウノリツーリズムでは主に豊岡で暮らす人たちを対象に、“地元の人から地元の人へ”長年に渡り培ってこられた知恵を譲り受け、守っていくこと、そして自分たちが住んでいるこの街をもっと好きになり、大切にしようと思うこと、そのように意識する人たちが増えることを願い、取り組んできました。



巣立ちの頃の早朝観察や、地元の食材を使った料理教室やお弁当の企画、地域の文化に触れること、冬鳥の野鳥観察など、私にとってもすべてにおいて新しい発見や、改めて豊岡を見つめなおし、もっと知りたいと思うきっかけとなりました。それぞれの企画に参加して下さった方が記入したアンケートの中にも、「～するきっかけになった。」という言葉がありました。私自身もこの企画を通じて、普段気付かなかったことやまわりの環境に意識を向けることができました。そして、小さな子どもから年配の方まで、幅広い世代の人たちとの出会いがありました。これも今ではコウノリが見つないでくれた縁だと感じ、これからも大切にしていきたいと思っています。



山本千里さんのお魚いちばん料理教室



ちょうど一年前、初めて管理棟から人工巣塔の様子を見ると、戸島ペアが卵を温めているところでした。コウノリをじっくり観察したこともなければ、子育ての様子を見ることも初めてで、一つ一つの動作、しぐさがとても興味深く感じられました。また、ヒナの孵化から巣立つまでを管理棟から観察していましたが、親鳥がヒナに餌を与えたり、雨や風から守っている姿は愛情たっぷり、コウノリに対する見方が変わったのはこの子育ての様子を見てからでした。ヒナが巣立ったときには、嬉しい気持ちと、頑張れ！という気持ちでいっぱいになったのを今

でも覚えています。管理棟に来館されたお客さんにも、コウノリをより身近に感じてもらえるように、私が見て、感じたことを伝えるようにしています。帰り際に「ヒナが無事に生まれるといいですね。」「今度はゆっくり時間がとれるときに来ます。」と声をかけていただくことも嬉しく、こうしたお客さんとの交流も私にとって貴重な経験となりました。

あっという間の一年で、戸島湿地を離れることはとても寂しいです。しかし、ここで経験させていただいたことや、得たものをこれからの生活に活かし、これからもコウノリに関わり続けていきたいと思っています。一年間、ありがとうございました。

ラム歩き（六方田んぼの冬鳥観察）



2012年2月25日、雪がまだ深く残る中、豊岡市主催の「冬鳥観察会」が行われました。この冬の積雪で1回は延期になり、やっと実施されました。それでも、まだまだ雪は深く、予定のコースを変更しての歩きでした。

朝、立野の円山川右岸堤防に集合し、早速、円山川にやって来た野鳥の観察です。いつもより少ないと言うことでしたが、カモ類、カモメ、カワウなどを見ることができました。そのあとは、案内して下さる「但馬野鳥の会」の方たちに引率され、六方川沿いに、河谷田んぼを回って冬鳥を見て歩きました。最近飛来しているコハクチョウを河谷の田んぼでたくさん見ることができ、もちろんコウノトリは姿を現しましたよ。他に、ホオジロ、エナガ、ヒバリ等々、観察した鳥は25種類、参加人数は約50人、それぞれに発見した鳥を見ながら、途中ではシカも登場しました。

河谷の朝市センターで、休息して暖かい飲み物を頂き、ぐるっと回って約2時間の観察会でした。野鳥の会の方たちの案内で、たくさんの鳥を見ることができました。普通に歩いてはとても見つけることはできません。鳥を見る「目」が無いと無理ですね。雪も深かったのですが、軽く汗をかき、運動不足が解消されたような半日でした。



コウノトリの結婚相談



3月20日に、今年度で退官される兵庫医科大学の山本義弘教授に戸島湿地で記念講義をして頂きました。遺伝学研究者である山本先生の講義、理解できるか心配を抱えたままでの参加です。遺伝学を専門とされる山本先生の、コウノトリを対象にした研究で、これまでにわかったことを教えて頂きました。

動物は単に数が増えてもダメなこと。同じ遺伝系統のものばかり増え、近親交配が進むと劣性遺伝子が蓄積し、さまざまな障害が現れるそうです。先生はミトコンドリアのDNAからコウノトリの判別を行ってこられました。その違いをハプロタイプと言うそうです。日本の飼育コウノトリを調べたところ13タイプだったとのこと（平成20年調査時）。日本のコウノトリはそもそも数が少なく、豊岡と日本各地の施設にいるコウノトリとの交換が必要で、さらには国外との交換等、遺伝的多様性を保つことが非常に重要とお話でした。

出石川でのコウノトリと、人と、牛の有名な写真、あのコウノトリたちは全部同じハプロタイプだったそうです。あの時点でコウノトリたちの運命は決まっていたのかもしれませんが。科学的な観点から見たコウノトリの課題について、うんうん唸りながら、また、納得しながらのひと時でした。

ハチゴロウの戸島湿地だより (1月~3月編)

(戸島湿地管理棟 森 薫)

~今年の冬は~

今年の巢は、こんもりと分厚く出来ています。2月初旬、塔の巢台には約20cmの雪が積りました。巢の主は、やむなく雪の上に巢材を運んで形を整えます。中旬には、その上にまた15cmの雪が積りました。仕方なくその上にまた巢材を運び…を繰り返した結果、一時は巢材と雪がサンドイッチ状態になるという珍しい状態の巢になっていました。雪が解けて巢がくっつくと、今までにない立



2月13日 戸島ペア

派な巢が出来上がりました。

吹雪のなかで寄り添い、懸命に巢繕いをして、真ん中には柔らかそうな草を運び、交尾を繰り返していたペアは、2月の末には産卵したようです。3月9日にコウノリ共生課の山本さんと佐竹代表が山に登り、3個の卵を確認されました。繁殖も5年目を迎えると、私でもペアが交尾するタイミングが分かるようになりました。2羽の寄り添う仕草で次の行動が分かるのです。「へ～え」と来館者の方が驚かれる瞬間に、ちいさな喜びをみつけていました。



~コウノリの様子~

2月13日、J0391(戸島ペアのオス)が伏せている巢塔にJ0384(赤石ペアのメス)が降りようと試みました。実は、J0391とJ0384は、2009年に戸島ペアが成立する前に交尾までした関係です。J0391は、クラッタリング(威嚇)もせず知らん顔をして自分たちのなわばりに入ってくるのを許しています。しかし、J0294(戸島ペアのメス)が帰ってくると、今後は一転して同調するように一緒にクラッタリングをします。3月1日の朝には、J0384が巢材を銜えて何と巢塔に降りようとしました。住居侵入です。J0294は、血相を変えてその都度追いかけて追い払っています。3月12日には、強風のなかでJ0384が上空を高く飛んでJ0294を挑発しているように見えました。擬人化してはいけなと言われても…観察をしていると、それぞれのコウノリの立場になって考えてしまい、心中複雑な日々が続いています。

~早川会員の野鳥観察から~

2009年12月から毎月1回、但馬野鳥の会会長で当会会員の早川さんが、湿地周辺での野鳥観察をされています。大雪の今年は、小鳥の姿を見かけませんでした。早川さんの記録(2月20日)を見ると、コウノリの他は、セグロセキレイ1羽だけとなっています。2月22日には、大きな猛禽が湿地上空を舞いコウノリを驚かせていました。早川さんに聞くとオジロワシの幼鳥とのことです。餌不足で南下したのでしょうか。

こんな厳しい冬だったので餌が採れずに小鳥たちはどうしているのだろう…と心配していましたが、3月16日にはカルガモ・アオサギ・カワウ・ハシボソガラス・セグロセキレイが観察されています。雪が解けかけた湿地でカワセミを見つけたときは嬉しく、今年も繁殖を期待しているところです。これから暖かくなるにつれ、いつものように小鳥も見られるようになってほしいと願っています。

※早川会員による観察会は、参加自由となっていますので、ご希望の方は管理棟(Tel.0796-20-8560)までお知らせください。


 思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

春は人事異動の季節でもあります。今回、コウノトリにとって大きな異動が2つありました。

ひとりには豊岡市コウノトリ共生課長の上田篤さんです。4月1日で地域戦略推進課長に異動されました。彼は、私がコウノトリ共生課長当時、平成17年度から課長補佐としてコウノトリチームに加わり、平成20年3月で退職した私の後を継いで、野生復帰・まちづくりを深化・拡大されてきました。仕事は速くて的確、その上温厚・太っ腹。「望ましい上司像」ピッタリで、異動直前まで困難な調整事に走り回る姿を見ていたので淋しい限りですが、新天地でのますますの活躍を期待しています。

もうひとりには、当会理事の宮村良雄さん。3月末で豊岡市をめでたく定年退職です。教育委員会で埋蔵文化財発掘調査という専門分野に携わっていました。当会では、個体目撃情報のデータ整理や現場でのピオトープづくりを黙々とこなす行動派かと思えば、何時間でもOKの議論好きでもあります。4月からは、「コウノトリのことを、より本格的に学びたい」と、コウノトリの郷公園で飼育員になられます。現場主義の彼らしい第2(3?あるいは4?)の人生が始まります。コウノトリのど真ん中での仕事と当会の活動の両方に、期待しています。

代わる者も残る者も、感慨は様々。まずはみんなで、もうひとつの春の風物詩・(4月初旬に顔を出すであろう)ヒナの誕生にもエールを送りましょう。


 編集後記

ひとり息子が二児の父となった。出産時には病院に泊まり、産後の妻を気遣い、家事育児に奮闘中だ。その姿を見ていると子育ては尊いものだと思う。私は、でしゃばらない努力をしながら、頼まれごとを待ちわびている。休館日に、長女(孫)の保育園の送迎が楽しくてたまらない。(森 薫)

今年の雪も多かった。昨年も多かったけど、今年は一段と…。雪国生まれではない私は、但馬に来た当初、雪が降るととても喜んで、周りのひんしゅくを買ったものだ。それからは、冬になって雪が降ってちょっと嬉しくなっても、顔には出さず、心の中で喜んでいた。でも、コウノトリが放鳥されてからは、すっかり気持ちが変わってしまった。今の私は、心の底から雪が降るのを嫌がっています。本当です。

(宮村)



戸島湿地内道路、積雪 58cm
管理棟に辿り着くには雪漕ぎして
いきます。



☆ 1月～3月戸島湿地管理棟を訪問頂いたお客様方
🌸 今年は何度も大雪にみまわれました。でも春は必ず訪れます。アカガエルの卵塊とふきのとうを湿地で見つけました。